



事業までの120年余りの間に、都合5回の駅舎の改築に着手している。

中でも、1993年の取り壊しまで約60年間、長野市民はもとより、長く県内外からの訪問者に親しまれた「仏閣型駅舎」が深く印象に残る。

鉄道、定期バスを合わせた長野駅での1日当たりの乗降客数は約3万人で県内第2位の乗降客数である松本駅（約1万7千人）の約2倍に相当する。

1888年に開業した長野駅は、2015年の北陸新幹線金沢延伸開業に合わせた改築

そしてそれは、また今回新たに開業した駅舎の正面に連なる大庇と列柱に引き継がれている。

2009年夏、長野商工会議所がJR長野支社を訪れ、「門善町にふさわしい駅舎の造形の復元」を陳情したことに端を発し、JR側が受け入れたことでそれが実現したものである。

ちなみに大庇と列柱については、長野市が別途負担し、発注・建設している。

また、その長野駅善光寺口も、現在の東口のように、1968年から20年余りの歳月をかけた土地区画整理事業（正式には、善光寺口は第一土地区画整理事業、東口は第二土地

整理事業）により完成した都市造形が基本であり、それと並行して民間資本が投入されたことで、現在の街形が形づくられている。

（続く）

清水 秀幸氏（しみず・ひでゆき）1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商会役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市総合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか3委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長

株式会社さくら都市総合研究所

主 席
研究員

清水 秀幸